
緋色の記憶

布袋しぐれ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋色の記憶

【Nコード】

N3890Z

【作者名】

布袋しぐれ

【あらすじ】

突然失った幸せの日々。同胞たちは、すべて瞳を奪われ、殺された。その瞳のために、殺された。

闇市場で高値で取引される、『緋の目』のために。

そのための手段など選んでいられない。けれど、その道を邪魔する男がいる。

妙な奇術師、ヒソカ。言いようのない、なぞめいた男。彼が、私の行く手を邪魔する。乱す、この復讐の道を。

ヒソカが私の心臓を止める前に、蜘蛛の心臓をつぶす。たとえそれ

が、私ひとりになっていたとしても。

偶然の出会い

殺された、いなくなった、同胞たち。必ず、仇をとると、幼馴染は言った。必ずや、この同胞たちの目を、取り戻してみせると。

私たちは、特異な民族だった。感情が高まると、瞳が鮮やかな緋色に変化する。それゆえに、苦勞することは多かった。闇市場でかなりの高値で取引されていたことは、周知の事実だったから。私たちは、自分の身を守るための、護衛術は心得ていた。この血は、途絶えさせてはならない。とても、小さな頃、そう長は言っていた。記憶に残っている。

その翌日、私たちクルタ族の同胞たちは、目をひとつ残らず、奪われた。

目の前が真っ赤になった。生き残ったのは幸運だった。幼馴染と、たまたま少し山を越えた向こうに、出かけていたから。食料を、探すために。力が抜けたように、籠が手から滑り落ちた。

「……父さま……？」

「……幻影旅団の……し……」

「クラピカ？」

「くっそ……幻影旅団の仕業だ……」

「……なんでそう言えるの」

「前に聞いた、長おさからも……同胞が、襲おさわれたと……蜘蛛の刺青の入った、やつに」

「……それって……」

「……ああ……そのときも、目は奪われていた……居場所が、バレていたんだな」

「随分と、冷静ね」

「……いいや、冷静に見えるか？」

「分からないわ・・・私、もう目の前真っ赤だもの」
「私もだ」

「・・・クラピカ、私たち、どうすべきなのかな？」
「目を、取り戻そう」

深いため息を同時に、クラピカは小さく、それでも力強く言った。
次第に感情も落ち着いてきて、目の前がクリアになる。頭に血が上ったせいか、少しぼうつとするが。

「どうすればいい？」

「どうすればいいのか、分からない」

「・・・私、闇市に紛れ込もうか？」

「ば・・・そんな危険なまねをするなっ」

「うーん・・・でも情報は入れられるかもよ？その、幻影旅団？の情報も手に入るだろうし」

「何を考えているかと思えば・・・くだらないことを言うな」

「でも、それ以外に、方法ってある？」

「・・・それは」

「いいの、私なら大丈夫。クラピカの心配には及ばないわ」

「・・・心配はしておらぬさ」

「まあ、随分なもの言いね」

「クルタいちの術師が」

「護衛術だけだね」

「・・・連絡は必ず、取り合おう。週に一回は、かならず・・・
そうだな、ここで」

「・・・危険じゃない？」

「大丈夫なのだろう？」

「分かったわ、クラピカ」

「ああ」

「・・・ねえ、クラピカはどうするの？」

「私か？私なら心配ないさ。情報を集めるよ」

「・・・集める？」

「ああ」

多分、これがきつかけだっただろうな。

私たちはそれぞれ分かれて、この日以来、一週間ごとに会っては、情報を交換していた。最も、ほとんど収穫はなかったのだが。

しかし、その生活が数ヶ月続いた、ある日、会うことはなくなつた。来る日も、来る日も待っても、クラブピカは来なかった。何があつたのか、聞く術もなく。私たちは、共に17歳になった。

闇市場は、反吐が出そうなほど、気持ちの悪いものの好きの連中もいる。黄色の髪色に、茶色がかった瞳。この容姿だけでも、十二分に目立つというのに。クラブピカに最後にあつた日に、貰ったカラーコンタクトをいれていても、やっぱり目立つものは目立つ。

「お嬢ちゃん、君、いくら？」

「・・・売り物じゃないわ」

「機嫌が悪いね、どうかしたのかい？前の客の気前が悪かった？

私はその10倍はだそうか？」

「うるさないあ・・・売り物じゃないって言っているのが聞こえないの」

「ん？」

「このっ・・・腐れ変態野郎！」

「うつがうつ!？」

男の顎に蹴りを入れると、一瞬、顔が緩んだ。とんだ変態だったみたいだ。とりあえず、ひと安心。

「お見事」

「誰？仲間？」

「いいや。ボクはただの通りがかり」

「何？」

「素晴らしい蹴りだったね、何か習っていたのかい？」

「まあね」

「そうか、いつかお手合わせ願いたいものだ」

「（そんな真面目なヤツに見えない・・・）いいわよ、私はマリ
ア」

「うん、マリアね。ボクはヒソカ」

「・・・ふうん・・・」

「それにしても、君、随分と若そうだけれど？」

「失礼ね、もう17よ」

「ここがどこか分かってる？」

「分かっているわ。愚かじゃない」

「愚かじゃなかったら、ここにいないんじゃない？」

「事情って人によるでしょう」

「・・・うん、そうだね。気に入った。お茶でもどうだい？疲れ
ただろう？」

「・・・いいわよ」

偶然って、本当に恐ろしいものね。

柔らかな微笑み

オレンジ色の、さらっとした髪を、風にたなびかせるのを楽しむかのように。かすかに、目を細めたように見えた。

重たげな二重が、ゆっくりと瞬きして、また私を捉えた。目の端とか、そんなんじゃないかって、きちんと。

「・・・何？」

「いや、別に」

闇市場から抜けた、少し洒落たカフェテラスに座っていた。アンティークな椅子と、茶器。普段の生活からは程遠い場所だ。

「さつきから・・・何？」

「つれないなあ・・・クツクツ・・・」

「（気味悪いなあ）」

「・・・君、あそこになんで居たの？」

「言えない。企業秘密ってやつかしら」

「・・・企業？」

「（まずい）所属はないんだけど」

「ふうん」

「あなたこそ」

「ボク？ボク、暇だったから・・・変わったものでもないかなあ・

・・・って」

「・・・娼婦おんなでも探してるのかと思った」

「ん〜、そう見える？残念、かも」

「・・・そうには見えないけれど」

「まんざら、間違いでもないけれどね、ボク、変態らしいし」

「・・・昼間からジョークが過ぎるわ」

「よく仕事仲間に言われるんだよ」

「気にする必要もなくって？」

「・・・そう言ったの、君が初めてだよ・・・可笑しい」

「・・・あらそう」

じつと食い入るように見られることは少ないからか、少し変な感じがする。

「元は良いのに」

「え？」

「ううん、なんでもない」

「顔に何かついてる？」

「そういうのじゃないよ、気にしないで」

「・・・気になるわ」

「君、元は良いのに。飾らないのかい？それくらいの歳だろう？」

「うーん・・・気がついたら、この歳って感じだから・・・分かんないなあ・・・」

「そっか・・・」

「何？」

「いいや」

そういうと、ヒソカは初めて、まともに目線はずした。初対面の男に、ここまで口を割ったのは初めてだったから、少し疲れた。

「あなた、いつまでいるの？」

「ん？？さあ」

「少し、寝ても良い？」

「今かい？」

「うん」

「ここじゃ、少し目立つからね・・・いいよ、寝てても。けれど、移動してても勘弁してくれるかい？」

「うーん・・・場所によるけれど・・・」

それよりも、眠たさのほうが、確実に勝っていた。

どうでもいいさ。成るようになるだろう。別に、危機感を感じないし。

私は、一気に眠りのふちに落ちた。

連絡が途絶えたのはいつだったか。いつかの日、確か、私はあの約束の場所に行けなかった。急な仕事を立て込んで、気付けば、日付もとつくに変わって。それ以来、会っていない。もう何ヶ月経つただろうか。確か、おとといは、彼女の誕生日であったはずだ。毎年、欠くことなく祝っていたのに。今年はできなかった。毎年、何かは贈っていた。小さい頃、初めて贈った、『白い花』。名前は知らなかったけれど、美しかった。小さく、可憐に強く咲くその姿に、彼女を重ね合わせていた。

「もう少し、別れる前、手段を選べばよかったな」

呟いても遅い。連絡手段を与える機会は何度もあったというのに。愚かな、自分。憎い、自分が。心配はどんどん積もっていく。

顔の筋肉が、硬くなりそうだった。

「クラピカさん、仕事」

「あ、はい」

目の前のことで、いつもみたいに手いっぱいだった。

目覚めた夜

カーテンの隙間から、夜の景色がのぞいていた。真っ暗な中に、かすかなネオンが光る。

赤いカーテンの部屋。はて、ここはどこだろう。身体を起こすと、悪趣味なまでに赤いベットシートに目がいく。

「(ここは?)」

「おはよう、いや、こんばんは」

「どっ、ここ」

「ボクの部屋」

「あ、そう」

「今から、ボク、仕事だから」

「え？」

「寝ててもいいし、自由に使って」

「・・・いや・・・でも」

「誰か、待ってる？」

「いいえ、帰る場所はないから」

そう、帰るべき場所はない。今日だって、どこかで野宿か、安い宿を取るはずだったし。

「じゃあ、ね」

「・・・お言葉に甘えるわ」

「うん、良い子」

「・・・」

「しばらく居るといいよ」

「しばらく?」

「イヤになれば出て行けばいい」

「日数の話？」

「もちろん。好きなだけ、過ごせば良い。君に興味を持った」

「・・・娼婦じゃないわ」

「分かってるよ。ごめん、ごめん。じゃあ、ボクは一旦、仕事に行って来るから。朝になったら帰ってくると思つよ」

「分かったわ」

直ぐにヒソカは出て行ったようだった。扉の閉まる音が玄関のほうからした。

このベットはあの人と同じような、不思議な匂いがする。少し柑橘めいた、ミステリアスな香り。イヤじゃない。それよりも酷く落ち着いた。

「どうしよう・・・やることないし」

とりあえず、ベットから出ることにした。

あまりの仕事の多さに身が持たない。酷く、最近は疲れている気がする。仕事が終わると直ぐにベットに入って眠りにつく。シャワーを浴びるのも、最近は朝の日課になってしまった。面倒なのだ。夜はとにかく眠りたい。ハンターではないが、雇われの警備として名のあるグループの、ボディガードをしている。

ふと、無作為においてあった新聞に目が留まった。『ハンター試験、今年も開始』

「・・・ハンター？」

前々から気にはなっていた。一体、どういうものなのか。一般人が立ち入り禁止の区域にも、ハンターなら入れやすい。莫大な資産も手に入ることもあるとか、ないとか。とにかく、今より随分と生活がしやすくなるそうなのだ。

「・・・好条件なのだが・・・一体、どういうものなのか」

考えては見たが、今はそれより、眠たさのほうが確実に勝っていた。とりあえず、眠ってしまおう。今、考えるのは無理だ。

頭まで深く、布団を被り、眠りについた。

「今日、スーツ？」

「やあ」

「ヒソカ、趣味変わった？」

「いいや、ちよつとね」

「いいと思うけれどね」

シズクは小首をかしげながら、そういった。

「今日はどうするの？」

団員からの、何気ない問いに、クロロが静かに口を開いた。

「盗みにいく。ヨークシンシティにあるビルにある、翡翠の涙だ」

「翡翠の涙？」

「計画を説明する。よく聞いておいてくれ」

「はい」

幻影旅団が、ひと暴れする。まるで嵐の前の静けさのように、街はいつもどおり、ネオンも煌いていた。

久方ぶりの夢の中

あまりに深い眠りについていたせいなのか。久しぶりに、夢を見てしまった。

あれは多分、村のはずれにあつた、池。美しく風にたなびく木々の陰。ああ、懐かしい。水のおいも、何もかも、心地よく懐かしい。ああ、帰つてこれたのか。

村に戻つたら、先生のところに行つて剣を教えてもらわなくつちや。ジュールたちに負けてる。早く、強くなつて、一人前になりたいし。何より

……。

「クラピカ」

「……なんだ、いきなり……驚いた」

「驚かせた？ごめん」

「抜け出してきたのか？」

「お裁縫、苦手だもん」

「そんなの練習しなくては、うまくならないに決まっているだろう」

「そうだけれど……イヤよ、私も剣を習つてみたい」

「私たちの習い事だ。マリアはいけない」

「何でよ」

「私たちが剣を習うのは、守るためだ。マリアたちは、私たちに守られていればいい。それが私たちの幸せだ」

「……そう、悪い気はしないわ」

「素直ではないな」

「うるさい」

「戻ろう」

「ん？イヤよ、折角抜けてきたのに」

「どうやって？」

「”お腹痛い”って迫真の演技で」

「・・・あきれたものだ・・・」

「それで結構」

「・・・」

隣に黙って、また腰を下ろした私を驚いた目で見た。

「戻らないの？」

「いるのだろう、まだ」

「そうだけれど」

「剣の稽古は生憎、今、休憩中だ」

「休憩中？」

「ああ、怪我した」

「えっ・・・クラ」

「私ではない」

「・・・そっか」

「骨を折ったらしい。先生が手当てをしている、じきに終わるだろうが・・・まあ、いいさ」

「適当ね」

「マリアには言われたくないものだな」

私が笑ったように、そういうと、マリアはふてくされたように、そっぽを向いた。そういう顔も、可愛いと思いついた、最近。私の中にも、こういう感情はあったのか、と。妙にむず痒くって、恥ずかしくって。くすぐったかったけれど。

「失礼ね、本当に」

「・・・もう決まったのか？」

話題を、何気なく婚礼のほうに向けた。

私たちの民族では、女性は17を迎えたら、嫁ぐのが決まりだ。

嫁ぎ先も、星の導き、相性も最も良い相手のところに決まる。マリ

アの場合、少しはなれた丘に住む、アステカのところだった。今年で25になる奴のところだ。

アステカは、少し口が重いが、剣は達人並み。先生の次に強いし、何より博学。それに、面白い人だ。私としても、それなら、というぐらいだった。

「決まったわ」

「嬉しく、なさそうだな」

「お兄ちゃんみたいに慕ってた人だもん。イヤだわ、関係が変わっちゃうの」

「大丈夫さ」

「・・・クラピカはいいよね、男の子だもん」

「・・・」

「心配ないじゃない」

酷く傷ついたように、笑う、マリア。痛々しかった。ごめんって、いえなかった。それどころじゃない、罪悪感と、嫌悪感が押し上げてきたから。

「マリア

」

「っ・・・」

息が苦しいくらい、つまっていた。一気に、溜まった息を吐ききると、肺が少し痛んだ気がした。

夢を見ていたらしい。あれは幼い頃の記憶。私たちがまだ、16だったころの記憶だろう。懐かしい夢を見たものだ。

しばらく、マリアには会っていない。元気にやっているんだろうか。何も、憂いていないことを願うばかりだ。心配事は、彼女には似合わない。彼女には、そんな顔、してほしくない。

「マリア」

返事の返ってくるはずのない、名前を呟く。

すると突然に、扉が強く開かれた。

「クラピカっ・・・起きていたか、まずい、翡翠の涙が奪われた！ 追うぞ」

「はいっ」

会いたい
・・・たったひとりの同胞に。

夢を見た。とても懐かしい夢。駄々をこねていたあの頃。駄々をこねることも許されていた、守られていたあの頃。

「・・・懐かしいなあ・・・」

呟く、と不思議と、涙が出てきた。懐かしい、恋しい、戻りたい、帰りたい。お母さん、お父さん、クラピカ。会ってないね、とても長い間。会いたいよ、少しでも。連絡する術がないの。どうしてもればいいんだろう。会いたいよ。どうしても、会いたいよ。恋しさが、積もっていく。まるで、風に吹かれ、積もる落ち葉のように。積み重なっていく、感情。

赤いシャツが、さらに濃い赤に染まっていく。

視界が赤くなるのが分かった。ヒソカに戻ってくる前に、沈めなきゃ。忘れなきゃ。下手したら、殺されてしまうかもしれない。売られてしまうかもしれない。昔、この市場に出てきた頃は、よくあった。もうそんなのは、イヤだ。

鎮まれ、鎮まれ。忘れろ、忘れろ。大嫌いだ、この赤い目が。この目のために、殺された同胞。この目を持ったばかりに。苦しい、イヤだ。憎い、キライだ。

「戻って・・・」

苦しい。

こんなに目の赤い夜は、暗い同胞の瞳が嘆くようだ。私をただ見つめて、暗い瞳で。私を忘れてはくれないのね、同胞よ。

今、仇をうつからね。待ってて。苦しめないで。分かったから。
「戻って・・・」

「ただいま」

玄関から、そう呟いた。初めてかもしれない。マチがここに来たときすら、言わなかったのに。不思議な子だ、あの子は。

布団で眠る、マリアの傍のシーツは染まっていた。泣いたあとがある。涙の筋が、まだ、残っている。

「なにか、思い出した・・・のかな」

その頬を、さっと拭くと、静かにマリアは息をした。

優しくない朝日

日はまた昇る。希望の朝も、悲劇のあとの朝にも。同じように明ける朝が、あまり好きになれない。きつとあの日が、全てを決めてしまったんだろうね。本当なら、望むべき朝を、嫌ってしまうんだろうね。寂しい、性。

「……」

「やあ、おはよう」

「いつから、そこに」

「君の目が覚める、三時間前から」

「……暇じゃなかった？寝なかったの？」

「うん、まあね」

「変ね」

「よく言われるよ」

「……何？」

「なんでもない。朝ごはんにでもするかい？」

「ん……ん」

「曖昧だね？」

「うん……あんまり食べるほうじゃないから……いいかなあ・

……って」

「ああ、なるほどね」

「……」

「ボク、もうすぐしたら、数日空けると思う」

「数日？」

「うん。もしかすると数ヶ月かもしれないけれど（家に帰る習慣
なかったし）」

「何をしにいくの？」

「うん？君も行くかい？ハンター試験」

「ああ、ライセンスの……いい。いらないから」

「そ。まあ、いいけれど（そっちのほう为好都合かも）」
「ん」

「自由にしていい。この部屋も、家も。帰ってくる保障はできないけれど」

「いいよ、私、放浪癖あるし」

「また君に会いたいからね」

「・・・」

「じゃあ、そろそろ準備していくよ」

「え？もつすぐって・・・そのもつすぐ？」

「ん」

「・・・ばいばい」

「ばいばい」

多分、言葉を失うってこういうことを言っただろう。
しばらく、その場にぼうつと座っていた。

「ええっ、辞める？君の働きは十二分に評価をしたつもりだった
んだけど・・・」

「そうではなくて」

「何が不満なんだい？」

「ハンター試験を受けに行きたいので」

「クラピカ君？何も、全て投げ打つ必要は・・・」

「分かっています。けれど、片付けてから行きたいんです」

「・・・そうか」

「お願いします、ボス」

「うん、うん、分かったよ、了解した。受理することにする」

「ありがとうございます」

「その代わり」

「・・・はい・・・？」

朝が嫌いだ。人と別れるにしても、夜別れるより、朝別れたほうがこたえる。精神的に参る部分が、大きい。私は、ずっとそう思っていた。

背を押す人も、ものも、何もなくなってしまった今。私は、そう思っていた。

失うものなど、何もない。崖っぷちでいい。誰かがそういつていた気がする。もしかすると伝記か、何かかもしれないけれど。少なくとも、その言葉が、私をここまで生かしている。

今日、やっと。今朝、やっと。嬉しく思った。朝が来たことが。朝、その始まりのありがたさが。

『その代わり』

『・・・はい・・・?』

『絶対、受かって来い』

『はい』

『応援している。ああ、これは餞別だ。持って行ってくれ』

『ありがとうございます』

『また、仕事をしたかったら、おいで』

『はい』

『いつてらっしゃい』

『行ってきます』

こんなに満ちた朝があること、今日まで知らなかった。希望の朝なんていうのは、タイトルだけじゃなかったんだ。

「・・・行ってきます」

優しくない朝日（後書き）

どうしてもヒソカの会話文に、ハートとか、スピードとか入れるの面倒で・・・ごめんなさい。しつこ承を。

奇術師のにおい

ヒソカからいつもしていた。クルタの最後の日のにおい。あの、村に帰ったときの、におい。無力感に、教われた。悲しい、におい。ヒソカからは、その断片的なにおいがした。近づくと、脳の奥がしびれるような錯覚を覚える。それはどこか、悲しくて、懐かしい。あの幸せな記憶と、惨い記憶の断片が脳内を駆け抜ける。走馬灯みたいに。

ぎゅっと自分を抱きしめて。しっかりしなきゃって。いつまでも、あの男の帰りを待っているわけにはいかない。情報を探さなくっちゃ。それが本命なもの。私は、そのために生きているんだから。

最初から思っていた。44番は、まずい。血のにおいを感じていた。

「クラピカvsヒソカ！」

審判役の男の、力強い始まりの合図で、幕を開けた。出来れば、この男と対戦したくなかった。あまり好ましい、対決ではなかった。望むといったら言葉が変だが、こんな試合は、望んでいない。

「イイよ、抜いて」

「・・・そのつもりだ」

トランプの、音がやけに耳に障る。集中したい。気をとられてしまふ。私と、したことが。

「おと・・・トランプは半分じゃゲームできない。君も同じだよ。それじゃ、つまんないから・・・しっかりしっかり持ってて」

「・・・失いはしないさ、絶対に」

「だとイイよね」

トランプが投げられた。ああ、馬鹿馬鹿しい。こんなのどう返っ

てくるか、分かりきってるじゃないか。どういうことだ。こんな分
かりきつた軌道で、投げてくるなんて。

それより何より、ずっと微笑を絶やさないこの男。押し殺しては
いるものの、漏れ出す殺気は抑えきれないようだ。ひしひすと、目
に見えない細胞一つ一つに確実に感じていた。

「イイこと、教えてあげようか」

「何だ」

「君さあ、もう負けてるんだよね」

「なぜそういえるっ」

「フッフ・・・でしょ」

私が剣に目を向けたと同時に、そういった。ヒビが、入っている。
さっきの分か。いや、違う。さっきの攻撃はこれが目的であったか。
迂闊だった。

「1本でいい」

「・・・ねえ」

「何だ」

「ボク手加減してるんだけど・・・抑えられなくなっちゃっよ」

「・・・だからどうした」

「ああ、たまらないね・・・またゾクゾクしてきちゃった・・・

ああ・・・重なっちゃっ・・・君、ボクの知り合いによく似ている
よ」

頭の隅に、マリアが過る。昔、よく2人でいたら、見分けがつか
ないといわれたことがある。血は、そんなに近くないのに、なぜだ
か顔は、瓜二つなのだ。最も、今でも多分、マリアが髪を切れば、
見分けはつかない程度だろう。少しマリアのほうが、小さいが。

「・・・」

「君によく似ている・・・声までも」

「だからどうしたっ」

「たまらないよ・・・彼女の戦い方を見ているようで」

「・・・っ」

やはり、勘違いではないかもしれない。ヒソカが言っているのは、紛れもなく、多分マリアのことだ。

目の前が真っ赤に変わる。
投げられたランプが、そっくりそのそのまま、ヒソカの肩に刺さった。

覚悟はしていたものの、やはり尋常じゃない。ヒソカの顔は、まるで狂気に歪んでいた。

でも、それとすぐに、さっきまでの顔に戻って、両手をあげた。まるで降参でもするかのように、こちらに向ってくる。

『で、待ってるよ・・・それから・・・マリアも君も知り合い同士、かな。同じにおいがしたよ』

「・・・え」

「ボクの負けでいいよ。次で決めることにした。いいだろ、別に」
マリアが、ヒソカと接触している　　・・・？

待てないわ。待てないの。私のこの身は、ただクルタの復讐のためだけに。この心臓は動いている。また街にいかなくてはならない。行かなくては、ほしい情報も何も、得られない。

『お世話になりました』

紙切れをテーブルの上に残して、扉を閉めた。

さよなら、おかしな人。

意外な接触

仕事を預かった。よりにもよって、試験の帰りに。めんどくさいとか、思いつつもちゃんとしちゃうんだから。ちょっとお人よし過ぎるってもんかな。まあ、有料だけれど。

付き合いが長いから、仕方ないってところもあるのかも。まあ気まぐれだし。何より、今は仕事も入ってなかったからね。でも、ライセンスも取ったことだし、さっさと仕事したいんだけどなあ。

漆黒の長髪を揺らし、ひとりで闇市場へ出向いた。

ヒソカに、頼まれた。随分と久しぶりの依頼かもしれない。いや、初めてかな・・・分からない。まあ、いいや。今回は殺人じゃないから、断ろうかとも思ったんだけど。随分とイロをつけてくれたから、やることにしたけれど。普段なら、伝言程度に、わざわざ動いたりしないからね。

『イルミ』

『何？』

『頼まれごとがあるんだ』

『何？』

『頼まれてくれないか？』

『内容による。殺人なら無論構わないけれど』

『ああ、殺人じゃないよ。悪いけれど。伝言してほしいことがあるんだ』

『専門外だけれど』

『できないわけじゃないよね？イロ付けとくから』

『どれくらい？』

『そうだね・・・うん、一日、30000。終わったら70000支払うよ』

『うーん・・・』

『伝言だからね・・・おそらく、家にはもういないと思うんだよ』

『家？』

『ボクン家』

『（近くに）家あったの？』

『失礼だなあ・・・まあいいや。うん、この前までは一緒に暮らしてただけだね。多分、出て行ったと思うから。探してほしいわけ』

『いいよ、そこまで言うなら、分かった。で、何？』

『・・・って伝えてほしいんだ』

『分かった』

ハンター試験会場から、真っ直ぐ向ってきたけれど。2時間もかかるとは思わなかった。僅かな空腹感を感じ始めた。そういや、随分食べてないか。さっさと終わらせて、何か食べよう。

あの、出て行った日から。情報はこれっぽっちも掴めなかった。

約束の場所にも行った。けれど、クラブピカは現れなかった。何となく、分かりきっていたことではあったけれど。頭の片隅、予測できたことではあったけれど。なんとなくの、虚無感。何もしたくなくなった。どこかで情報が出てこなくてもいいかなあって。そう考える一瞬はあった。けれど、それ以上に、夜毎必ず夢を見て。あの同胞たちが語りかけてくる。真っ暗な空洞で。そうして、苦しくなつて。また歩き出すをやむを得なくなるのだ。

「そろそろ仕事探さないとなあ・・・」

「姉ちゃん、幾ら？」

「は？」

「いくらかって聞いているんだよ。一回、だめか？」

「幾ら出すつもりだ？」

「額によるのか・・・手持ちはあんまりないからなあ・・・そう

だな、80000くらいかな」

「結構。それならいい。相手にする気はない」

「・・・はっ、このア」

「じゃあ、俺が200000出そうか」

黒髪の、妙に目の大きい人。つややかな髪は、まるで女性のよう。しかし、それを十二分に否定できるだけの筋肉が、その身体に纏われていた。

「あなた？何？」

「伝言を預かっているんだ。少し時間がほしい」

「分かった。ごめんなさい、私、こっちの人と行くわ」

「・・・分かったよ」

軽い舌打ちを含んで、さっきの男はさっさと踵かかとを返した。

「じゃあ、場所を変えよう」

「お金は結構」

「要らないの？」

「いいわ。そういうつもりじゃなかったし。伝言料、必要？」

「貰ってるし、追加で貰う予定だから、いいよ」

「うん、そう」

割と近くの路地の裏に入る。途中、壁のへこみを撫でると、そこは朽ちた木の扉が取っ手をなくして隠れていたようで

気味の悪い音を立てて、開いた。

妙に薄暗い光が入り込んでいて、ほこりっぽくって、変な空間だった。

「ヒソカから、預かった」

「ヒソカ・・・」

「彼、君を知ってるらしいけれど、合ってる？」

「合ってるわ。マリア、私よ」

「うん、よかった。率直に言う。ヒソカの元へ帰って」

「何で」

「探してる、結構、真面目だよ。何があったか知らないし、知っ

たこつちやないけれど。戻って、家で待ってるかも」

「そういう人なのかな・・・」

「多分、次は手段も選ばず、君を探し出すと思う」

「・・・」

「『言いたいことがある』って。直接、会って」

「・・・」

「一応、伝えたよ。俺も暇じゃないし、疲れたから」

「・・・」

「今から帰ったら、いるかもね。2時間ちよつと前に試験終わつたから」

「・・・」

「帰つたほうが賢明だと思うよ。君が痛い目、あいたくないならね」

「痛い目？」

「昔かなあ・・・気に入った子がいたと思うんだけどね・・・その子、割と直ぐに死んじやったね」

「死・・・」

「本能的に狩っちゃつたのかな・・・もしかしたら、熟れたのかも」

「・・・」

「良いこと教えてあげるよ。ヒソカは青い果実にしか興味ないんだ」

「・・・」

「まだ死にたくなかったなら、帰ることだね。まあ、言ったからね。あ、帰り道、分かる？」

「・・・うん」

「じゃあ、気をつけて」

「・・・」

「次、君の死体に出会わないことを祈るよ」
「・・・」

ずっと、すぐに消え去ってしまった。
私はまるで、死の宣告を受けた、患者のような、気分に陥った。

そして再会の

この道を忘れたわけではなかった。格別に、ややこしい道でもない。見通しの悪い、見落としやすい道でもない。ただ、何気なく暗い気持ちに支配されて。あまり帰りたくなかった。

自分の気持ちに、後ろめいたなにかを感じている。現在、進行形で。脅しに、ひれ伏した様な、そんなわけじゃないけれど。

心のどこかで望んでる。ヒソカは何か、知ってるんじゃないかって。クルタのことも、クラピカのこと。何か、知ってるんじゃないかって。心のどこかで、その幻の現実を望んでいる。お願い、そうであってって。

ヒソカの家の前についた頃には、辺りは少し暗くなっていた。家の中から、小さな光が漏れていた。家の灯りはつけていないくせに、ランプの類はつけているらしい。全く、趣味の分からない男だ。

「ヒソカ」

「・・・おかえり、待ってたんだよ」

「・・・ごめん」

「食事の用意もできてる。食べよう」

「・・・うん」

「そんな深刻な顔しないで・・・毒なんて盛ってないよ・・・クツクツク・・・それともイルミになにか言われた？」

「・・・いいえ」

「そう」

嘘をも見抜きそうな顔をしている。思慮深そうな、瞳。

「ヒソカ」

「何？」

「言いたいことって、何？」

「……」

「……ヒソカ？」

「食事しながらにしよう」

「うん」

ヒソカに促されるがままに、テーブルにつく。ちゃんと用意された、温かな食事。なんとも、イメージ型破りな。

「そんなに意外だった？ボクだってちゃんとできるのさ」

「……意外よ、かなり」

「そうかい」

「……いただきます」

「どうぞ、召し上がれ」

それからしばらく、沈黙の後、ヒソカがぼそつと話始めた。

「君の、仲間に会ったよ」

「……っ!？」

「赤い瞳の、そう、確か闇取引されている目を持つ、部族だった？」

「……」

「生き残りはいないはずだったけれど……狩り残しがあつたんだねえ」

「え」

「幻影旅団を追っているのかな？ならばやめたほうが良い。今の君なら、容易く折れてしまう」

「……折れやしないわ」

「いいや、折れるね。簡単に……」

「……すぐに死ぬって言いたいの」

「その通り。賢いね、君は」

「それだけが言いたかったの？」

「そういうわけじゃないけれどね、まあ、そういう感じかな」

「・・・仲間って言ったわよね・・・」
「ああ、金髪の、男の子さ。君に良く似た」
「・・・(クラブピカだ)」
「確か、クラブピカっていう」
「・・・」
「会う場所と日時を指定している・・・君もついて来るかい？」
「ええ」
「即答だね、良いよ」
「・・・ときどき、ヒソカは分からない」
「・・・そう」
「どうして、そう、お節介をやくの」
「ん？」
「お金の為、手段を人は選ばないわ」
「・・・何も聞いてないようだね？ボクには金も、女も、何も必要ない。ボクがしたいのは人殺し」
「・・・聞いたわ、その類なら」
「うん」
「・・・それでも、私を殺して、この目を売れば一生遊んで暮らせるかもしれないのよ」
「興味ないね」
「・・・それは本心？」
「意思を持った君になら、興味を持てるけれど・・・死んだ君には興味ない」
「熟れ切った、私にも」
「・・・(イルミ随分、余計に話してるようだなあ・・・)それは能力の話かい？」
「さあ」
「うん、熟れきつたら、そうだね興味はもてないかも」
「殺してしまう？」
「君は分からない・・・どうだろうね・・・まだ分からない」

「・・・」

「君が選ぶと良い。良い事を教えてあげよう。ボクは君が想像しているよりもっと、残忍で、汚い人間さ。そのために、手段も選ばないからね」

「・・・誰だってそうだわ」

「・・・」

「誰だってそうよっ・・・私たちを滅ぼした、あの蜘蛛だって・・・手段は選ばなかった・・・村にいた全員の目を奪って・・・私は・・・」

「そうか、その生き残りが君たちふたり・・・かい？」

「・・・そう」

「ふうん（いい念の色・・・垂れ流してる辺り、修行すればきつと、とつてもおいしくなるかも）」

「・・・」

うつむき加減の私を、ヒソカは笑みをたたえて、覗き込むように見ていた。

夢の中の明日（前書き）

イルミさんって、ひとりでぐらぐら喋っちゃうイメージ。マシンガントーク。徹子さんのな？（笑）ごめんなさい・・・

夢の中の明日

「さあ、もう遅いから眠ろう」

「うん」

気分は最悪だった。ぐちゃぐちゃ。めちゃくちゃな気分。とつてもブルー。いや、あえて言えば、緋色か。鮮やかな、赤だ。

ヒソカの手招く先、寝室の扉が開けられていた。でも、今すぐに眠りたい気分じゃない。

「……どうかしたのかい？」

「シャワー、使っても良い？」

「もちろん。タオルは上から二番目の棚にある。使い終わったら、籠に入れてくれていたんで構わない」

「……ありがとう」

「どういたしまして」

クスッと笑みをたたえて、ヒソカはそのまま部屋に入っていった。

「……違和感あるよ……本当に」

シャワーを浴びて、寝室に入ると、ヒソカはいなかった。どこへ消えたのか。ほんの数十分の間だったのに。

少し躊躇しながらも、布団にもぐりこんだ。シーツは冷たい。やっぱりどこかへ出かけてしまったのか。あの時と、同じだ。

「……（これじゃ帰ってきた意味ないんじゃない？）」

別にここが私の家っていうわけでもないのに。

可笑しな話。

多分、夢なんだろうな。はっきりと分かったわけじゃないけれど、ぼやっと。そう思った。だって、こんなあり得ない。あり得ない。あつたら困るし、何なんだろう、この居心地が悪いまでのこの感じ。何となく、くすぐったくって。変だ、変。

気がつけば、そこは芝生の広がる、広い場所だった。

「君の念は垂れ流しだ・・・うん、孔を開かないとだめだねえ・・・いいかい？今からボクの念を送る・・・そうしたら、君の念の孔は開かれるはず」

「念？」

「君が纏っているもの。いわゆるオーラさ。それを自在に変化させることで、強さが手に入る。念で形を作ったり、人などを操ったり、いろいろね」

ヒソカは愉快そうに、目を細めた後、そのまま私の背中に手を当てた。妙に冷たい手に、肩が一瞬、強張った。

「・・・じゃ、いくよ」

聞こえるけれど、小さな声で、ヒソカがさういうと、唐突に体中が変な感じがした。焼けるみたいな、熱い感覚。

「あつ・・・」

「集中して・・・イメージして・・・君の身体中に、空気をまとイメージだ・・・そう・・・もっと・・・ちゃんとイメージして・・・ほら・・・うん、そう」

「・・・これ・・・」

「うん、それが念・・・これからちゃんとコントロールできるように練習しよう・・・ほら、漏れてきてるよ」

「あ」

「集中、集中・・・」

「ヒソカ」

どこからともなく、この前の黒い髪の人が見えた。ヒソカに親しげに話しかけている。

「・・・あ、イルミ・・・マリア、紹介するよ。ボクの友人、イ

ルミだよ」

「友人なの、俺って」

「違う？」

「……知らない。この前ぶりだね、おかえり」

「……どうも」

「念、漏れてるよ、また」

「あ」

「当分は、この繰り返しかもね……でも随分、変なところから始めたね……強制的に開いちゃうなんて、失敗したら、どうしたのさ」

「大丈夫、マリアは失敗しない」

「言い切れないよ」

「知ってるよ」

「まったく、いいけどさ、知ったことじゃないし。何？ヒソカは育成したいわけ？弟子がほしいの？」

「分からない人だなあ……」

「分かったつもりだけれどね。まあ、いいや……なんか、そういう本、読んだ気がする……東洋の文献に、そんな話があった気がするよ。自分の気にいるタイプの子を育てちゃうって……まあいいけれどね」

「ふうん」

「殺しちゃだめだよ」

「分かってるよ」

「……ヒソカ……イルミも……あなたたちは、何なの？」

「ハンターさ」

「俺は暗殺が家業。殺しのプロってとこかな。これでも有名人なんだけれど？」

「……そうなの」

「で、君、クルタ族でしょ……知ってるよ。あれはお兄さんかなあ……ハンター試験に来てた、緋色の目の男の子……二刀流

で・・・まあ、結構芯のある子だったけれどね。君も鍛えたら、強い子になれるそうだね」

「イルミ」

「分かってる、横取りしないし、邪魔もしてないだろ、まだ」

「許さないからね」

「分かってるさ、分かってる・・・欲張りだよな、まったく。ゴンといい、マリアといい。勝手だなあ、この子が仮に近づいて、俺のキルアになんらかの影響を及ぼしちゃったら、どうしてくれるのさ」

「ないよ」

「言い切れる？」

「言い切れる。近づけやしない。マリアはボクの

・・・」

夢だと分かっていたいながら、随分、緊張していたようだ。身体中に、汗がびっしょりとまとわりついていていた。

「・・・っ・・・」

「目が覚めたかい？」

「・・・ヒソカ・・・」

「今日は出かけるでしょう」

「・・・どこに？」

「そうだなあ・・・広いところがいいかな・・・」

体中の血が、ぞわりと波打ったような錯覚を覚えた。

「念の修行？」

「・・・言っていたっけ？」

「夢を、見たの・・・ヒソカが、私の念の孔を開いた」

「・・・じゃあ、覚悟はできている？」

「ええ」

「そう、話は早い」

「ねえ・・・」

「何？」

「ヒソカにとって、私は、何？」

ヒソカはゆっくりと目を細め、口角をあげた。

夢の中の明日（後書き）

どうでもいいけれど、ヒソカ・・・世話焼きすぎな気がする。イメージ破り。でもきつと、もうすぐ変態化します。いろんな意味で。ここらへん、原作に忠実に（笑）

奇術師の戯言（前書き）

変態化注意報発令中？

奇術師の戯言

まるで、それは時間が止まったようだった。私には少なくとも、そう感じられたのだ。

「ヒソカにとつて、私は、何？」

まるで、おもちゃでも見つけた子供のように、目を細めた。無邪気な子供のように、ニヒルに笑う。

「うん・・・何だろうね・・・ボクにもまだ正直分からない」

「・・・分からないの？」

「うん」

「分からなくて、呼び戻したの？」

「イイだろう、別に」

一瞬、薄目を開けて、そう呟いた。それは間違いなく疑問系でなく、命令形の言い方だった。ときどきとる、そのマインドコントロールともとれる行動は、恐ろしいほど、精神に影響を及ぼす。おそらく、無意識のうちの仕草なのだろうが。

「・・・仕事中だった」

「仕事？」

「情報を探している・・・クルタ族の・・・緋色の目の行方」

「緋色の目の行方？」

「ヨークシンシティーのどこかに・・・競売にかけられていると聞いて・・・出てきたんだ」

「ああ、なるほど・・・ふうん、そう」

「・・・」

「なるほどねえ・・・クッククク」

「イルミって人って、暗殺家業？」

そのままの笑みは絶やすことなく、ヒソカはあっさりと言い放った。

「うん、そうだよ」

「……そう」

「……どうしたんだい、いきなり……随分と気になるなあ……」

「……気にしないで」

「気になるよ」

「……夢を見たの……広い空間……野外だったわ……ヒソカが私の念の孔を開いて、修行の途中、イルミが来た。そうして、『ヒソカにとってマリアは何』って聞くの。そうして……終わりのよ。夢を見たの」

「夢は欲望を現すという。一種の占いのようなモノだろうねえ……君の潜在意識の中に、知らず知らずのうちに、その願望が植わっていた……」

「……ない……それは、だ」

「言い切れないだろう。心なんて、あるようでないものだからね。ボクはすぐに心変わりはいしない。珍しいだろう。これだとおもったら、おいしくなるまで、見届けたい。そうして、おいしくなって摘み取るのは、ボクの仕事だ。こんなにつまらない日常に、甘さをくわえてくれる、ボクの果実たち……君も、その一員じゃないか？」

「……何が言いたいの？」

「君は、望んでいるんだろうって……率直に」

「何を」

「解放されたいんじゃないかい？もう、この生活から。見たところ、随分とあつてないみたいだね、同胞と。復讐の念を抱き続けるのは、そんなに難しいことじゃない。そうして、成し遂げるのも。」

君は、いつも眠りにつくたび、深い眠りにつくたび……目覚める」

「いつも、夢を見るからよ」

「そうだね、何を見ているか、ボクには分からないけれど。苦しんだらう？」

ヒソカの冷やかな目が、真っ直ぐに降り注いでくる。温かさなど、微塵もない。まるで、万年雪のような、視線。

「苦しい・・・だから、早く見つけないっ」

「容易く折ってしまえる・・・」

ヒソカが不意に、マリアの腕をつかんだ。一瞬、その拳に力が入って、握られた手首は熱を帯びたように、急に熱くなった。圧迫からくる、熱。

「っっ」

「いい顔だ・・・うん、そうだよ、君はやっぱリイイ・・・これからとっても強くなれるだろうねえ・・・その様子だと、強くなれる、間違いなく。今、摘み取ってもいい・・・一瞬で、苦しみから解放することだってできるんだよ、ボクも」

「いつ・・・」

「けれどね、今、摘み取ったら、楽しみが減るんだよ。君がどう成長していくのか、これからどういう道を選んでいくのか、とても気になる・・・何より、君たちはとても似ている・・・時々、あの熱い瞳がよみがえるよ。彼は、久しぶりにボクをゾクゾクさせた・・・ゴン以来さ・・・あんなにゾクゾクしたのは。エクスタシーの一步手前。美しいね、その憎悪・・・憎いかい？幻影旅団が」

「った・・・憎いにつ・・・決まってる・・・離せっ」

「離れたら、君は、逃げるんじゃないかい？」

「しないっ」

「分かった。信用しよう・・・」

「・・・」

離された腕は、真っ赤になっていた。よかった。ただ圧迫されていただけだ。軽く動かして、骨の類が可笑しくなっている様子はなかった。

「今、はっきり言うよ。今までオブラートに包んできた。もちろん、イルミにも」

「・・・」

「君は、ボクにとって、バンジーガムみたいなね・・・胸焦がれる感覚に陥るわけさ」

また、ヒソカが何事もなかったかのように、無邪気に笑った。
私は、蜘蛛以上に危ない人間に好かれてしまったようだ。

奇術師の戯言（後書き）

ヒソカの技の、バンジーガムって、ヒソカ自身が子供の頃に好きだったお菓子の名前からきてるそうですね・・・
お菓子を食ってるヒソカ・・・想像できない・・・

あ、感想下されば嬉しいです。

執筆意欲もすごい湧きます
単純人間なんで

ちなみに布袋、念の系統を診断してみたら、「特質系」って出ましたよ。

そんな性格らしいです・・・って分かりづらいか・・・

懐かしい背中（前書き）

今回はクラピカ視点で〜

随時感想おねだり中

懐かしい背中

ハンター試験も終わってから、念の存在を知った。そうして協会のほうから念の師匠を紹介してもらって、修行を始めようと思っていた。しばらく、山か、どこか人里はなれたところに籠るようだが、そのための日用品は欠かせないだろう。思い立ったら吉日、早速買い出しに赴いた街で、懐かしい背中を見つけた。

くたびれた風の、スーツ姿。心の内、まだあのスーツを着ているのかと、笑いそうにもなつたが。そういう自分もこの服を着ているわけだからなんともいえない。

「レオリオ！」

「・・・お」

「久しぶりだな、レオリオ」

「だな、どうしたんだ、こんなところで」

「買出した、もうすぐ修行に入る」

「修行？」

だらしなく、少し下げられたサングラスの奥で、彼の目は怪訝そうに揺れた。

「念の修行だ。ハンター協会から紹介してもらってな。近々、修行に入るのだよ」

「そうか、大変そうだな」

「勉強ははかどっているか？」

「うん、や。まあ、ぼちぼち・・・参考書にちよいと足らんトコがあつてな。書店に寄ってたところだ」

「そうか」

「一杯、茶でもどうだ？」

「構わないが。どうした、いきなり」

「いや、試験終わってから、どうも懐かしくてな・・・お前らのこと」

「・・・私もだ」

どこか照れくさく笑うレオリオに、素直に好感が抱けた。あんなに濃い時間を、初対面の彼らと過ごしたのだから、愛着の類だのなんだのがわくのは、珍しいことではないだろう。寧ろ当たり前前精神的な反応だと、考えるべきだろう。

「俺、コーヒー以外が飲みたい気分なんだが」

「私は何でも良い」

「そうか」

喫茶店は、恐ろしいほどにガラガラだった。午後4時という、微妙な時間が幸いしてか。店内には、マスターと、数人の客が、いるばかりだった。

「いらつしやいませ」

「オレンジジュースで」

「私はココア」

「かしこまりました」

「ココア？」

「何だ」

「意外だったから・・・すまん」

「構わない」

「・・・で、改めて、ヒソカどうなんだ？」

「なぜ私に聞く？」

「コンタクトはあったのか？」

「（接触のことか？）いいや、なかった」

「一度も？」

「まあな」

「・・・」

「ヨークシンで会うことになっている」

「・・・会ってどうするんだ」

「それはいえない。レオリオの首を突っ込む必要もないところだ」

「・・・妙な言い回し、やめろ」

「すまない、そういうつもりはなかった」

「・・・あつさりだな・・・お前、そなんだったか？」

「ああ、こんなんだったさ」

「随分とねじれてるなあ・・・分かりづれえ・・・家族もたいへん

・・・あ、すまん」

「構わない。ジョークだろう？お前のことは理解しているつもり

だ・・・家族は今、ひとりしかない」

「ひとり？」

「同じクルタの血を引く、女性だ・・・復讐の為、村で別れて・

一度や二度は、情報の交換のため、定日に会っていたが・・・あ

る日、私の仕事が大引いて・・・いけなかった・・・それ以来、会

っておらぬよ」

「・・・そうか」

「懐かしいついでに、彼女にも会いたいものだ」

「・・・名前・・・」

「マリアという・・・私に良く似た女性だ」

「・・・ん？お前、そつくり？」

「ああ」

「・・・」

「今、妙な想像しただろう」

「していない」

「お前はそういうヤツだ」

私は見逃さなかったぞ、口の端がつりあがるのを。

「酷え・・・ちよつとくらいいいじゃねえかよ」

「（やはりか）・・・まあ・・・そうだな・・・うん・・・気分

は悪いが」

「誰もお前にしたわけじゃないからな・・・ただ、お前の顔を借

りてちよいと・・・」

「気持ち悪い！会わないうちに変わったな、お前！」

「は?!」

「お前、随分と変になっているぞ！自覚はないのか、男たるもの、恥を知れ、恥を！」

「・・・お前も変わったなあ・・・」

「・・・あ、すまない」

「構わねえよ、別に」

「話が思いのほか、進まないな・・・こんなつまらない言い争いに時間を費やすつもりはなかったんだが、つい・・・試験の癖が抜けないらしい」

「まあ、仕方ないさ」

やはり、この男は良いヤツだ。金だ、金だとばかり言っていたが、少なくとも私には、とてもそうは見えない。やはり良いヤツだ。

懐かしい背中（後書き）

夜9時を回った辺りから、私の脳内活性化・・・可笑しな会話のオンパレード。

また明日にします。

話がずれてもイヤだから。

心の深くの不安

手に持ったカップを、愛でるかのように撫でる。何度も、何度も。そうして、記憶の深く、はるか昔のクルタに思いを寄せる。

「あまり話せないが・・・少し、レオリオにも話しておこうと思う」

「・・・ああ」

「私はこの命を今回の修行で、かけようと思う」

「・・・は・・・おま・・・」

「構わない。仲間の目が入るならば、そのために死んでも、悔いは残らぬさ」

「・・・おい・・・」

「レオリオ、戯言ではなく、これは」

「ふざけんなよ、お前。残される人間の身にもなってみろっ」

「お前に何が分かる！全てはクルタのためにっ・・・この命、ひとつなど惜しくはない。それは、彼女も同じだ。同意の上だ。クルタの瞳のために、残りの命をささげる」

「・・・復讐のためだけに生きるなんざ、虚しいだけだぜ」

「それは十二分に分かっている」

「じゃあっ・・・」

「分かっている。けれど、これは誓ったことだ・・・決めたことだ・・・」

「・・・そうかい・・・」

不意に、柔らかい表情になって、笑みをこぼした。まるで諦めたかのような、そんな半分疲れ切った笑顔。それじゃあ、まるで『お前を説得するのは諦めた』と言われているようではないか。そんな表情を、急にされると、妙な気持ちになるではないか。居心地の悪いような、落ち着かないような。

「私には、それしかできない」

「……」

「復讐だの、蜘蛛だの、何だのって……あの時からずっと思い続けていたが……日に日に怖くなる……もし私が復讐を果たし、目を全て集めて……あの丘に葬ったら……私はどうしていいのか、分からないのだよ……可笑しな話だ……こんなに今、焦っているのに、分からないんだ……その後、どうすればいいのか」

「……クラピカ」

「レオリオ、私は分からない……考えた……私から復讐が消えてしまったら……何……もない……何も残らないんだよ」

「クラピカ」

「……」

「俺も、ゴンも、キルアも……いる。お前がどうなるうと、いる」

「……すまない、気を遣わせて」

「気じゃない……^{ガチ}本当のことだぜ」

「……ありがとう」

不意に目の前が曇る。どうやら、いつの間にか、涙を流していたらしい。少し目の辺りが熱くなった。まさか、こんなことになるうとは。コンタクトが涙で浮いて、動きそうで怖い。

「大丈夫か？」

「平気だ」

「……」

「すまない、心配をかけたな」

「そういうんじゃないよ……」

「……フッフッ」

「な、何だっ」

「顔に丸出しだぞ……フッフッ……フッフッ……お前、分かりやすいな、やはり」

「うっせえ」

「だが、そういうところが私は好きだ」

「……うつせー、妙な感じがするからやめろ」

「そのうち、マリアにも紹介しよう。友人が出来たと」

「ああ」

「……さて、私はもう失礼するよ……買出しの途中なのでな」

「ああ、俺も行く」

「そうか」

「今日はありがとな」

「いや、それはこちらの台詞だ。随分と救われたよ、お前には。

礼を言う、ありがとう」

「……ドウイタシマシテ」

「何だ、どうした」

「お前にそんなに素直に礼を言われると照れる」

「……悪かったな、珍しくって」

「……」

「では、またな」

「ああ、じゃあな」

「……」

街の中に消える、懐かしい背中。私は、随分とお前に救われたよ。随分と、久しぶりに幸せな気持ちになることができた。お前にこんな精神の安定の効果があるなんて。驚いたよ、かなり。

黄昏のときに、やっと私は落ち着くことができた。妙な焦燥感は、既にそのときは消え去っていた。

心の深くの不安（後書き）

あ、告白しちゃった、みたいな。

まあ、そういう意味じゃないですけど

脳内はなおってないみたいです。

ただいま、午前3時・・・起きて直ぐ執筆はいかんですね。

誓いの印

ヒソカのせいで、随分と疲れきった。あんな人間だとは、正直、思わなかった。まさか本当に、殺人とかそういう類に興奮を覚える人間がいるとは。

少なくとも、ヒソカはそういう類だろう。

さつき握られた手首が、少しずつ青っぽくなってきた。折らなかつたとはいえ、ここまで強く握るだなんて。本当によく分からない人だ。何を考えるでもなく、私はヒソカに視線を向けた。

「どうかした？」

「出かけてくる」

「・・・そう」

「戻るから・・・半日以内には」

「そう」

「闇市に」

「そう」

「・・・行って来ます」

「うん、待ってるよ」

「はい」

クラピカが今、この状態を見たら、どう思うんだろうな。

外は妙に冷えた風が吹いていた。

闇市には色々な店がある。それが、違法だったり、合法だったり。パターンは色々だけれど、おおよそは違法ギリギリセーフだ。

その中のひとつに、ある店があった。以前から気にはかかっていたのだが。入ってみる勇気がなかった。その店の名は『青屋』。

朽ちかけた扉を開ければ、店主らしい、でぶつとした男が顔を出

した。

「いらつしやい・・・何を希望だ」

「ここは・・・」

「分からず入ってきた客か・・・ここは刺青屋だ・・・いらんなら出て行ってくれ・・・」

「用がない訳じゃない・・・幾らだ」

「・・・一回につき7000」だ」

「何でも、か」

「ああ。デカさによるがな。よっぽど面倒じゃなけりゃ、7000で結構」

「・・・では、頼む」

「どこに入れるつもりだ」

「自分で見えて、尚且つ、分かりやすい場所に」

「・・・腕なら、分かりやすいぞ」

タバコをふかしながら、男は言った。

「・・・いや、やはり・・・ああ・・・いや、ここに入れてくれ」

「・・・正気か」

「構わない」

「俺は自慢じゃねえが、この道は長いから・・・多分、失敗はしねえとは思うが・・・仮に失敗したら・・・」

「構わない、入れてくれ」

「・・・知らねえぞ、どうなるうと」

「ああ」

身に纏っていた上着を脱ぎ去り、上半身をさらけ出した。

男が一瞬、つばを飲んだのが分かった。くそつたれ。そう思いつつも、仕方ない。所望したのは私だ。

「・・・何を入れる」

「蜘蛛をナイフか何かでつぶしたヤツを入れてくれ」

「・・・分かった。サイズは」

「直径6?くらいで」

「分かった」

男は躊躇することなく、心臓の上の皮膚にどんどん、掘り進めていった。血が少しずつ垂れ、また垂れ。掘り進めるたびに、その傷はやがて熱を発し始めた。焼けるように、熱い。そんな感覚も段々と、じんわりとした、おぼろげな痛みに変わる。それから数時間で、色まで入れ終えた。

「ありがとう」

「御代はいい」

「・・・は」

「お前さんみたいな、綺麗な皮膚に刺青を入れたのは、久しぶりだ。気持ちよかったし、楽しかった。御代はいいよ。また色が抜けてきたら、来たらいい。入れてやる」

「そうか、すまない」

「・・・名前は？」

「・・・マリア」

「・・・待ってるぞ、マリア」

「・・・ああ」

私の返事に、男はその蓄えたひげに手をかけて、にやつと笑った。それは妙に温かさを含んでいて、どこか昔の父を見たような錯覚さえ覚えた。

誓いの印（後書き）

段々、マリアがクラピカ化してきたような・・・
話し方が

そして心臓の上に、刺青入れちゃった・・・

張り付く視線

家に戻ると、案の定、ヒソカはいなかった。

やっぱりだ、戻っておいでなんて言っときながら。本当は私が必要でも、ないんじゃないかって。思わさざるを得ない。

誰もいない、寝室でベットにダイブした。冷たい布団から、かすかなヒソカの匂い。今日も干していないだと、ぼやっと思った。

「・・・お帰り」

「・・・昼間の」

「うん、イルミ、覚えてる？」

小首をかしげながら、物陰から、さも当たり前のように、姿を現した。

「もちろん」

「ヒソカに今晚の留守を頼まれた」

「私がいるけれど？」

「君が逃げないか、監視しておいてって（ちょっと言葉を誇張しすぎたかな）」

「・・・ふうん」

「・・・」

「何か食べる？」

「いいよ、別に」

「じゃあ、私は食べるね」

「うん」

キッチンに入ると、イルミは後ろの壁に肩をつけて、ぼうつと私に視線を下ろした。視線はピリピリと、背中に突き刺さる。

「何」

「別に。監視」

「そんなに張り付いてするものだった」

「ねえ」

「・・・イルミ？」

「血のおいがるけれど、どうしたの？殺った？」

「刺青」

「・・・何の為に」

「・・・クルタを忘れない為に」

「・・・趣味が悪いね」

「ヒソカのほうがよっぽどよ」

「そうだね」

「ええ・・・」

「ヒソカも自分だけの果実にしたのなら、こっやって俺に任せたらだめだよ。本当に、悪趣味なのはヒソカだよ。もっともだよ、君、頭いいね。うん、言ってることって最もだ」

「・・・え？」

すつ、と、足音も立てずに、イルミは近づいてきた。そうしてイルミは私の目を真っ直ぐに見て、何を考えているのか分からない瞳で、言い放った。

「俺の手中にあるわけだから、殺ることも、犯ることもできるんだもんね。賢いね、本当に」

「・・・な、に？」

「刺青の可笑しくならない程度に犯ることだってできると思っ」

「何、考えてるの」

「別に」

「・・・」

「人の物に手を出す趣味を、生憎持ち合わせてないもんだからね」

「・・・」

「ねえ」

「今度は何？お腹減ってるの」

「・・・手首」

「ああ、ヒソカが」

「（愛情の形が年々、歪んでる気がする）」

「・・・何？」

「別に」

友人の小さな変化に、マリアの身の上を少し案ずる、イルミがいたのは知る由もない。

その男の性（前書き）

イルミが喋っちゃった
今日もとっても長台詞。

その男の性

何を考えているのか分からない瞳のまま、イルミは無表情に私を見下ろした。長い漆黒の髪が、びくとも動かない肩に張り付いている。少し血色の悪い肌のせいで、彼はまるで蠟人形みたいだ。綺麗な黒水晶みたいな瞳に、映る私。

憧れたんだよね、黒い目に。そうばやっとひとりで、内心、呟いてみる。いいな、黒い目って。

「正直、どうでもよかつたんだけれど」

まるでそれは、言い訳じみた独り言みたいに、イルミの口から少しずつ、吐き出されていった。

イルミを前にして、食事をするのって。どうも生きた心地がしなくて、浮き足だっちゃって。何となくだけれど、嫌だ。

イルミの黒い瞳は何を思っているのか、到底見抜けない。分からない。きつと隠しているであろう、本心など、まるでないかのようだ。

「・・・何・・・ヒソカが、どうしたの？」

「うん。正直、どうでもよかつたからさ、君の事。だから黙っておこうと思ったんだけど。ヒソカから口止めを食らってるわけでもないし、喋ろうかなくて。嫌ならいいけど？」

「ヒソカのことなの？」

「うん」

「・・・言って」

「いいよ、でも、ショックで姿、晦くらましたりしないでね。疑われるのは俺だから」

「分かった、約束する」

「うん」

イルミが小さく頷いた。納得したようだ。

何度か瞬まはたきした後、イルミはゆっくりと口を開いた。

「君ってさ。クルタ族だろう。っていうことは、探してるんだよね、幻影旅団」

「探してる」

「手がかりがないんだろう？」

「うん」

「ヒソカ、仲間だよ。幻影旅団の・・・っていつても詐欺みたい
な感じだけれど。騙し騙しで入団した。よく分からないけれどね、
正直なところは。けれど、多分、団長が気に入ったんだろうね。団
長の強さが」

「・・・」

「手に入れたいものは手段を選ばないし、気に入らなくなったら、
殺しちゃう。愛情表現って極端なんだよ。飽きた瞬間、殺しちゃう
のも、一種の同情の念からかもしれないけれど。俺はわからない。

物に対する執着心にも似てるのかもね。彼、快樂殺人者の癖へきあるから。君も哀想に。滅多にない奴に気に入られちゃってさ」

まるで本当に哀れんでいるかのような、口ぶりだった。イルミは、
一瞬、ぼうつとして、そうしてまた視線をマリアに向けた。

「君、復讐したいんだろう？」

「もちろん」

「つけいたら？」

「は？」

「うまくいけば、君、復讐できるかもね」

「な・・・」

「まあ、頑張ってよ」

「・・・イルミは緋の目を見たことはある？」

「あるよ」

「・・・」

「仕事でね。何回だろう・・・多分、4回くらい。全部で15くらいかな・・・両目だから30か」

「大丈夫、不敗防止加工は施されてたから。まるで生きてる人間の目みたいなのに、液体に浮いてて、驚いちゃった」

「・・・そう」

「まあ、綺麗って言うのも、ああなっちゃえば分からない気もしないけれど」

「・・・」

「でも、良くつぶさず出せたよね・・・」

「・・・イルミ、今何を考えているの?」

「『なんて無神経なの』っていうところ?君が今、考えていること」と

「・・・」

心臓がびくつく。驚いた。正直、言い当てられるとは思わなかった。

「でもそれがクルタの目をみた人間の感想だと思うよ。普通なら、そう思う」

「・・・そうよね」

「うん」

話がひと段落下らしく、またイルミの視線は、真っ直ぐ私に向けられた。

ちらつく同胞の影

ここにもいない。あそこにもいない。会いたい、会えない。もう随分と経った。私たちが別れてから。たった一人の同胞だったというのに。お前に会えないなど、私はどうしていいのかわからぬよ。緋色の目を求める前に、私はお前を求める。

ヨークシンシティに赴いた矢先、こんな現実にぶち当たるなど思っても見なかった。

まさか、こんなに早く、会うとは。望んでもいない、奴と。

「やあ」

「・・・ヒソカ・・・」

「こんなところで会うなんて、偶然。奇遇？運命の巡り合わせですぞいね」

「気持ちの悪いことを言うな。お前に会うためにヨークシンシティにきているわけではない」

きつくにらみつけると、ヒソカは言い表しがたい、笑い方をした。微笑んでいるような、いないような。貼り付けたような笑みであった。

いつものペイントはなく、前髪も下ろされていて、どことなく別人のようだ。

あの身体に馴染みきった、殺気を感じとったのがきっかけであった。すぐに奴と気付いた。

「うん、そうだね。そうだけれど、そんな釣れないことを言うなよ」

「お前とはどうもこうも、そういう間柄でもないのではな

「まあね」

「なぜこんなところにいる？」

「ヨークシンシティになぜいるかって？」

「ああ」

「それはもちろん。用があつたから」

「旅団か？」

「鋭いね」

「・・・旅団か？」

「まあね。その延長みたいなね。ああ・・・そう」

「何だ」

「マリアは元気だよ、多分ね」

「た・・・お前は一体、どういうつもりだ・・・マリアと・・・」

「一緒に暮らしている。あれ、言つてなかつたっけ？」

「・・・暮らしている？」

「無論、ボクの身元は知らないけれどね・・・イルミがなにも喋らない限り」

「・・・イルミ？キルアの・・・」

「その通り。さすがだ」

うつすら目を開けて、ヒソカは手を叩いた。嘲笑うかのような、拍手。

「馬鹿にするな」

「・・・してないさ。今日も出かけたけれど、もう戻っているだろつね。おや、どうしたんだい？目を赤くして」

「・・・」

「ばれちゃうよ」

「・・・分かつている。だが・・・」

「そそられるねえ・・・とことん、ボクを乱す・・・ボクを興奮させる・・・最高だよ・・・ゴンと同じくらい素敵だ」

「・・・」

「会いたいかい？マリアに」

「・・・」

「会わせてあげても良いんだよ、仲間だろつ」

「・・・会いたいのが本音だ・・・しかし・・・」

「つまらない意地を張るなよ。構わない。敵に頭を下げたくない

なら、それで結構。イイよ、ついておいで」

「・・・」

黙ったまま、ヒソカの後ろに続いた。ヒソカが大人しく、私を連れて行くなど、あまり考えられないが。賭けてみよう。もし本当ならば、私はやっと、マリアに会えるのだから。

もし違うならば、この男、次こそ

・・・。

ちづつく同胞の影（後書き）

クラピカ・・・うわい！

わっしょいして下さい！

私を！w

蒸気と化す水と枯れ流れる葉（前書き）

ついにマリアの能力の系統が・・・

蒸気と化す水と枯れ流れる葉

じいっと、何も含まない目で見つめられるのもなんと

．．．居心地の悪い。

本人には到底、いえないけれど、これはこれで。結構、きついで。そこらの拷問より何より。

イルミの真つ黒な瞳は綺麗だけれど、まるで何も映していないよう。最初に抱いた恐怖心は、もう薄くなっているけれど。イルミに対する疑念とか、そういうのはまだしこりのように、存在感たっぷりに張り付いていた。

目を合わせても、クスリとも笑わない。変な人。

でもその瞳を見ているたびに、何かの魔術に掛かったみたい。自分のなすべきことを、今すぐにも行わなくてはいけない気に陥る。錯覚かもしれないし、もしかするとそういう精神のコントロールかも。

「マリア」

「ん？」

「食事は終わった？」

「うん」

「今から少しテストをしようと思う。いくらか、念の修行は終わってる？」

「そこそこ．．．あ、四五行は終わったよ。まだ絶^{ゼツ}はうまくいかないけれど、そのほかの3つならできる．．．応用はまだ、ムリよ」

「じゃあ、練^{レン}はできるんだね？」

「うん、まあ」

「今から、念の系統を調べるから言われたとおりにしてね」

イルミはどこからともなく、グラスいっぱいの水と、その上に小さな葉を浮かせていた。緑色した綺麗な小さな葉は、揺らぐことなく留まっていた。グラス擦り切れいっぱいの、水は今にも溢れそう

だ。

「このグラス・・・」

「このグラスに練レシを行って」

「練レシを？」

「うん」

そうイルミがうなずくと同時に、玄関の扉が開かれた。いつものように、すまし顔のヒソカが部屋に入ってくる。

「丁度良かったみたいだね」

「ヒソカ、タイミングがいいね」

「客人だよ、マリア」

ヒソカがその場を離れると、その後ろから思いもしない影が現れた。

金髪の髪に、青い見慣れた民族衣装。ヒソカと10cmとも変わらない、身長に似つかないほどの、中性的な顔立ち。

クラピカだ。

「・・・ク」

「・・・マリアッ」

「ね、言ったでしょ？」

「・・・生きていたのね、会いたかったのよ」

「すまなかつた・・・仕事を立て込んでいたのだよ・・・行けなかつた事を詫びる。すまない、心配をかけて」

「・・・大丈夫。こうして生きてる」

「・・・今回は敵ながら感謝しよう、ヒソカ」

「そう、素直でイイ子だ」

「ヒソカ」

話のそれかけた空気を、正したのは、イルミだった。ヒソカは少し頷き、『やり方は分かったね?』そう言って、やるように合図した。

クラピカのほうを一瞬見れば、クラピカもまた頷いた。

「クラピカ」

「私もやった。集中するのだ」

「・・・うん」

集中して、練レンを行う。

そうして、しばらくするとグラスにゆっくりと変化が現れた。

グラスの底に、ふつふつと水の粒が現れた。まるでそれは、沸騰の起こった水のような。そうしているうちに、浮いていた葉は、やがて枯れ始め、その美しい緑を冬の枯葉の色に染めてしまった。沸騰した水はグラスより沸き出でて、浮かんでいた葉を流してしまっ
た。

「・・・これは・・・」

「強化系の雰囲気もあるけれど。操作系のほうが大きいように思
うんだけど、俺」

「特質系だろうね、これは」

「うん」

「特質系？」

黙っていたクラピカが、口を開き、説明を始めた。スラスラと。
まるで、そこにメモでもあるかのように。

「念というのは、強化系、変化系、放出系、操作系、具現化系に
分かれる。これは主なもので、あとひとつ存在する。それが特質系
というのだが、これは身につけようと思って、身につけられる能力
ではないらしい。この様子だと、マリアは操作系からの突然変異だ
ろうな」

「同じく。そうだと思うよ。マリア、とても素晴らしい能力を授
かったね」

ヒソカは満面の笑みで、マリアに語りかけた。

クラピカも穏やかな顔で、マリアに微笑みかけていた。とても嬉
しそうだ。

イルミは相変わらざる無表情で、頷いていた。

「ともかくおめでとう」

「ありがとう！」

「マリア」

「うん？」

「どうしたい？」

「・・・どうって？」

「このまま、彼と一緒にいきたいか、行きたくないか」

「・・・え？」

「選択して・・・マリア」

ヒソカの満面の笑みは、どこかダークな部分を含んでいるようだった。こんなに満面の笑みが怖いと思ったのは、もしかすると初めてかもしれない。

蒸気と化す水と枯れ流れる葉（後書き）

操作系の突然変異、特質系です！

さて・・・どうしようかな・・・

ということとは、マリアは

シャルやズシみたいに、マイペースで理屈屋で

クラピカやクロロ、ネオンみたいに個人主義者で、カリスマ性有り
つて・・・こと？

気まぐれに愛でる指先に

一瞬、時も止まった錯覚に陥った。まるで楽しい話でも、しているかのようなそついう雰囲気。ふんわりと、その空気は柔らかく軽い。しかし、それと同時に、向こう見えぬ霧のような恐怖も体中が感じている。

ピリピリする。もし誤った選択をしたら、どうなってしまうのか。彼はつなぎとめると思う？この平凡な私を。いいえ、到底思えない。繋ぎ止めないだろう。多分、手放す。

「好きにすればいい。ボクの顔を伺う必要はない」

「・・・ヒソカ、私は・・・」

「うん」

「クラピカといきたい」

「構わないよ、それでも」

「・・・私を殺さないの？」

「・・・」

細めの目を、少し丸く開いて。まるでとが豆鉄砲食らったみたいな。そんな顔になった。こんなヒソカの顔を見たのは初めてかもしれない。

「・・・ヒソカ」

「クツクツク・・・つくづく、おかしな子だ。殺さないよ、勿体

無い」

「・・・」

「大丈夫。心配しないで。そんなことしないから」

「・・・ヒソカ」

「行っていいよ、行くんだろう？」

クラピカのほうに目を向けると、クラピカは頷いて手を差し出した。昔みたいに、自然にゆっくりと。

差し出されたては、昔とは大違い。肉刺まめが昔より、できていて。

ゴツゴツと骨ばっていて、会わなかった月日が、クラピカの手に刻まれていた。

「さよなら、ヒソカ」

「ばいばい」

「・・・」

「また会うだろうね、君たちには」

「・・・え？」

「目、戻るといいね。クックック・・・」

悪戯に笑う、ヒソカの傍から、どんどん遠ざかっていく。

「行こう」

強く引かれるクラピカの手に、すがるように。足早に遠のいていった。

さよなら、ヒソカ。さよなら変な人。

長い黒髪をかきあげて、興味なさげにイルミが口を開いた。

「いいの？お気に入りにじゃなかったっけ？」

「うん。これから成長するだろうからね」

「・・・ヒソカ、噛みあってない。気づいてる？」

「これから成長するのに、お預けだなんてちよっと苦しいけれど・

・おいしいものは最後に食すタイプだから」

「・・・じゃあ」

「そっだよ、奪いに行く。ボクのお気に入りは、ボクのもの」

「じゃあ、もう帰るから」

「うん、ありがとう」

「うん」

イルミはすぐにその場から立ち去ってしまった。

いつもの空間がそこに残った。ただいつもの空間だけが、ヒソカに残された。

しばらく無言で歩き続けると、その先に黒い車が止まっていた。

クラピカは何も言わずに、その車のドアを開け、のるように促した。

「待たせたな、レオリオ」

「構わねえよ」

「マリア、乗ってくれ」

「うん」

ドアを閉めて、後部座席にクラピカも乗った後、紹介を始めた。

「運転してくれているのは、友人のレオリオだ。ハンター試験で

会った」

「初めまして・・・レオリオさん。マリアです」

「レオリオで構わねえよ」

「レ・・・レオリオ？」

「そう、それで構わねえ」

「（こいつ鼻の下が長くなっている）出してくれ、レオリオ」

「あ、もう帰るのか」

「ああ、オークションに向けて計画を練らなくては・・・マリア、

私は今、雇われハンターをしているのだ。だから一度、ボスの元に

帰る。レオリオと共に行動をしてくれ。しばらくの間だから・・・」

「分かった」

「レオリオは大丈夫だから、安心しろ」

「どういう意味だよそりゃあ」

「そのままだ」

「・・・分かった。よろしく願いします、レオリオ」

「任せな」

「（不安だが）任せた、私からも宜しく頼むよ」

「はいはい」

これでよかったのだと。この選択は間違っていなかったのだと。
自分に言い聞かせた。

揺れる緋の目（前書き）

いつも皆様、ご愛読ありがとうございます！

感謝を込めて・・・

今回も全力で執筆

スクロール覚悟！

揺れる緋の目

車の中、押し黙ったまま。ただエンジン音だけが、静かに聞こえていた。ときどきミラー越しに、後部座席の様子を伺いながら、少し心配そうにレオリオは運転をしていた。

憂うことも、何もかも。蓄積されてしまった。すっかり変わった、クラピカの姿。

最後にあつた日。以前はあんなに、可愛らしくって。女の子みたいに丸みを帯びた輪郭も。そして、血色の良かった頬も。今では、すっかりシャープになって。頬も、どちらかという土色のようだ。疲れ果てているのか、少しげっそりとしていた。

おそらくそれは、レオリオにも分かるほどであつたのだろう。心配気に、ちらちらと目をやる雰囲気はすぐに、それと分かった。

瞳を閉じて、静かに眠る、クラピカ。そのまま、眠り続けてしまふいそうなほどの、静かな深い眠り。痛々しい、その色。

「(クラピカ・・・)」

昔が。今よりずっと幼かった、昔が。酷く恋しいね。

あなたと出会つたのは、丁度5歳を迎えた朝だった。

村のはずれ、小さな川のほとり。私は籠いっぱいに自生するベリーを採っていた。『今日は誕生日だからお祝いしましょうね』って。そついわれたのを覚えている。

そうしたら、あなたは一人、川のほとりで物思いにふけるように、座り込んでいた。

幼いながら思った。とても印象深く覚えている。それはとても綺麗な絵画の一枚のようだった。まるでそこだけ時が止まったように、

まるで永遠のように。

ふと視線に気付いたあなたは、私のほうを向いて、柔らかく微笑んだ。

それが、始まりだった。

「私、マリア」

「私はクラピカだ」

「何をしているの？」

「川を見ていた」

「それだけ？」

「ああ、それだけだ」

笑って、また肯定した。少し長めの襟足が、柔らかく風に揺れた。

「今日は私のお誕生日なのよ」

「そうなのか。おめでとう」

「ありがとう」

「何かお祝いをしなくてはならないな・・・そうだ、これをもらっ
つてくれ」

「?・・・いいの？」

「ああ、構わない。マリアさえよければ」

今も私の片耳に揺れる、小さなイヤリング。クリアなアメジストの色。光の屈折を受けて、綺麗に揺れる。私の、宝物。私の思い出と一緒に。

そうして、そういう日々も奪い去られたのだ。

幸せも、思い出も。もう思い出すほか、手段はない。この記憶に鍵をかけて保管できたらいいのに。強く願っていた。記憶は日々変わって、忘れ去られていく。この幸せな日々を忘れ、いつか復讐の業火をその身に纏う日が来てしまったら。私は、きつと耐えられないだろう。復讐の業火に身を焼かれ、復讐にこの身を投じ、そして
死す
.....

豪華なホテルの前、レオリオの車が止まった。

「悪い、クラピカを起こしてやってくれ」

「・・・クラピカ・・・おきて・・・着いたよ」

「・・・んんっ・・・すまない・・・」

「ううん」

「クラピカ、ここだったか？」

「ああ、ありがとうレオリオ」

「ああ」

「では、マリアを頼む」

「任せろ」

「マリア、また会おう。オークションはもうすぐだから、きつと直ぐ会える」

「うん、またね」

「ああ」

足早に、ホテルの中に戻っていった。雇われているといったから、きつとボスがこのホテルに泊まっているのだろう。一体、どんな人なのだろうか。

また車は静かに発進して、夜の街を抜けてゆく。

「・・・元気なかつたですね、クラピカ」

「ああ。あんまり顔色もよくねえし・・・ついこの間も、熱を出していたんだ」

「え」

「もう熱自体は下がったと思うけれどな・・・」

「・・・そうですか」

「やっぱり違うな」

「え？」

「俺らと一緒にいるときと顔が違う。身内ってのは、やっぱりいいね」

「・・・」

「幾分、いい顔してたぜ、クラピカ」

「・・・そうですか、よかった・・・」

「ホテルに戻ってる途中なんだが、なんかほしいものあるか？買って行きたいものとか・・・」

「いいえ、いいです」

「そうか？まあ、なんかあったら気軽に言ってくれ」

「はい・・・すみません」

「いいってことよ」

「ありがとうございます」

「（見てくれはほとんどクラピカみてえなのに、中身はいい子だな・・・くすぐってえ感じだ）」

アクセルが加速して、さらに遠くへ。

オークションまであと少し。運命の日まで、あと少し。

ねえ、クラピカ。私、心に決めていたことがあるの。たとえば、あなたが消えても。たとえば、私が消えても。どちらか片方の生きる限り、同胞の目を全て奪い返して、あの地に埋めてあげようね。

あの地で、私たちも永遠の眠りにつければ、いいのにな。

揺れる絆の目（後書き）

せ・・・切ない・・・

全編シリーズで、ますます加速！

忍び寄る蜘蛛の(前書き)

今回はついにあのお方登場！

忍び寄る蜘蛛の

最近、ヒソカが仕事が終わるとすぐに帰って行たから。いくらか可笑しいと思っていた。いつもなら一人でトランプタワーを作っては崩すなり、マチに絡んでいってほっとかれるなにしていたもの。すんなりと、帰ってしまう。

格別、用があるわけでもないが、少し気になっていた。一体、何があるんだろう。自分の日常を捻じ曲げてまで良い時間が待っているのだろうか、と。

「ヒソカ」

「ん？」

「お前、何かいいことがあったのか？最近随分、ご機嫌じゃないか」

「ああ・・・ちよっとね」

「俺にも言えないことか？」

軽く、少しニヒルに笑って見せると、ヒソカは笑い返して。少し考え込む仕草をして、『団長だから、特別』とか妙なフレーズの言い回しをした。

「実はね、すっごく面白い玩具を見つけた」

「・・・ハンター試験のやつか？」

「ううん、関係ないよ。街を歩いていた、女性」

「・・・随分な趣味だな」

「ねえ、団長は覚えているかい？」

「・・・何を？」

「クルタ族」

「・・・緋の目を持った・・・ヤツらであったか？」

「そう・・・彼女、その生き残り」

「・・・生き残り？」

「もう・・・ゾクゾクするよ・・・感情が一気に流れ込む瞬間の、

あの目の色といたら・・・殺したいのに、殺せないじゃないか・・・
妙な気分になっちゃって・・・麻薬みたいだ、彼女」

「ほう・・・」

「あれ、興味持ちちゃった？ダメだよ、団長といえど」

「分かっているさ」

口先では何とでも言えるしな。ヒソカの玩具だなんて、なんと興味深いのだろう。それだけでそえられる。さぞかし、絶世の美女なのであるうか。それとも・・・。

「じゃあ、ボクはもう帰るから・・・イルミゆじみんに留守を頼んでるし」

「ああ」

両手で覆った口元から、笑いが消えなかった。

これは、ほしい。

もし、生きたまま、俺の自由にしてしまったら、どうなるんだろう。あの目は美しかった。今度は生きてるギリギリの最高の色を見たい。色の、移ろいを見てみたい。

少しくらい、構わないだろ

・・・好奇心に駆られ、

俺はそれがほしいと思った。

ブレーキを踏んで、ホテルの前に車は止まった。そこそこ、小綺麗な、ホテルであった。ロビーはベビーピンクのような、上品な色に統一されていた。

「ここに泊まってるんだが・・・部屋、とって来るから待ってな」

そう言っつて、レオリオは私をロビーに残して、すぐにフロントに行ってしまった。

見渡せば、何か名のある彫刻であろうか。それが大層な様子で飾られているのが目に付いた。とても立派だ。どことなくミステリア

スな雰囲気は漂っていて、どこかこのホテルに馴染んでいない空気にたまたまなく、そそられるものを感じた。

「・・・(綺麗だな・・・)」

「部屋取ったから・・・400号室」

「あ、ありがとうございます」

「なんかあつたら、俺は204号室だから、来な」

「はい」

「じゃあ、あ、これ携帯の番号だ・・・何かあつたら、な」

「はい」

「じゃあ、俺は部屋に戻ってるからあとは、ご自由に。おやすみ」

「おやすみなさい」

軽く私に会釈して、レオリオはエレベーターに乗り込んでいった。とことん、いい人だと思う。

再び、その彫刻に目を戻すと、さっきまでは感じていなかった存在に気付いた。この彫刻の裏側に誰かが立っている

・・・?

彫刻の裏側を覗き込むと、少し長めの前髪を下ろした、優しそうな男性が立っていた。私と目が合うと、ソフトにはにかんだ。

「あ・・・ごめんなさい」

「どうして謝るの？」

「あ、いや・・・その・・・」

「この彫刻はとても不思議だよね」

「・・・私も思ったんです。ミステリアスな雰囲気だなんて」

「これ、女性の頭部を彫ったものだけど・・・この作者って妻を何人も亡くしているんだって。自分と結婚した女性は皆、死んでしまっつて。自分の死の間際まで信じていたらしい」

「悲しいですね」

「それで、彼は最期の力を振り絞って・・・病にかかっていたんだけど、これを仕上げたって」

「・・・」

「そういう逸話があるんだよ」

「じゃあ・・・これはもしかすると、その奥さんなのかもしれないですね」

「うん」

「・・・悲しいことですね・・・」

「・・・そんなに真剣に聞く人がいるとは思わなかった。俺の話、退屈じゃなかった？」

「面白いです。とっても興味深い・・・」

「あ、食事はもう食べた？」

「まあ、軽くは」

「じゃあ、お茶でもどう？おいしい紅茶の店がこの近くにあるんだ」

「・・・じゃあ」

「そう、行こう」

「あ、お名前は？」

「俺？俺はね、クロロ。クロロ＝ルシルフル」

「クロロ・・・」

「君は？」

「マリアです」

「マリアか・・・可愛い名前だね」

クロロという、その男に連れられて、そのままホテルを出た。

思えば、早く気付けばよかった。仕事るとき、散々、あの名前は聞いていたのに。クロロって。

ほしいなら、奪ってでも・・・それが、モットーだから。

忍び寄る蜘蛛の（後書き）

次回はかなり過激になります
ご注意を！

残酷な系に絡まった蝶（前書き）

結構過激な描写を含みます。

泥沼系作家、布袋の本領発揮であります！
ご注意を。

残酷な糸に絡まった蝶

いつもとは慣れない、ぎこちない背を追いかけて。ヒソカより少し小さな背を追いかけて外へと出た。ホテルの外は随分と暗く、そして思ったよりも寒さが増していた。ビルの隙間風が、いつもの服じゃなくって、タンクトップみたいな格好をしていた私の肌を容赦なくさした。

ぶるつと、本能的な身震いをしてしまった。

「寒い？」

「あ、大丈夫です」

「はい、これ着て」

クロロが自らが羽織っていた上着を、マリアの肩にかけた。

「あ・・・え」

「俺は暑がりだから。ね？」

「ありがとうございます」

「さあ、行こう」

「はい」

そこから2分か、3分位だっただろうか。歩いて行った先は、そこは人気ひんぎの無い、ビルの裏側であった。

「・・・」

急に何も無い、壁の前に立ち止まるクロロ。何を思っているのか、分からない。少なくとも、ここでお茶などありえはしないし、これは、もしかして

「ク・・・ロ」

「甘いな・・・二度もかかるなんて・・・」

くるつと振り向いたクロロの顔に、もう優しい笑顔なんて無かった。ただ、残酷な欲望に、その目を光らせていた。極限まで高まって、お預けを食らった、ヒソカにも似ている、その狂気。

「・・・一体・・・」

「マリア、覚えていないだなんて不幸な子だ。可哀想に・・・俺はヒソカみたいに優しくない。ほしいものは、どういつ手段を使っても、得る」

「・・・」

「クルタの、生き残りか・・・」

「っ!？」

その声が合図であったように、クロロは急に、マリアの顔に手を添えた。まるで、眼球に指を入れるのではないかと思うくらいの、強い力で。触れるというより、半ば、押さえつけるようだ。

「生きたまま眼球を奪い取る趣味は無い・・・そんなのには飽きた・・・オークシヨンまでまだ日があるんだ。少し遊びに付き合ってくれ」

「・・・」

「無論、拒否権はない」

「・・・」

「仲間の尻拭いだと思え。お前の仲間も、俺たちの仲間を殺^やったんだから」

「え・・・」

「聞いてないのか・・・鎖野郎は、俺たちの仲間を殺した」

「・・・ク・・・ラピカが・・・？」

「名前など、どうでもいい。さあ、どう償ってもらおうか」

目の前が真っ暗になった。もう腰から下に力が入らない。ペタン、と少し湿った地面に座り込んだ。

「・・・」

「顔が悪いわけじゃないし、体つきもいい・・・そうだな、2日間くらい旅団で奉仕してくれてもいいが・・・それはあまりにも面白くないな・・・」

「え」

「とりあえず、俺はその目の色の移ろいが見たい」

クロロはそのことを言い終えるか、終わらないかぐらいで私の肩

に手をかけ、そのまま強く地面に押し付けた。

仰向けに押し倒されて、なんとも情けない姿だろう。めくれ上がったスカートの上端、見たくも無いものが見えた。ざらりと夜に鈍く光る、ナイフ。切れはさぞかしよさそうだ。

「やめっ……」

「そう。抵抗してくれると面白いってもんだ。どうしてくれるよるか……うん、足の腱を切っても俺的には面白いんだが……君が面白くないよね」

「……っつあ……」

勢いをなくして、ゆつくりと太ももに突き刺さった、太いナイフ。骨と筋組織のギリギリを切り離されるように、ナイフを入られた。言い表しようの無いくらい、痛い。しかし、目の色など変えてなるものか。相手の思う壺だ。目の前がじんわり赤みがかってくるのを必死に押し殺した。

「あれ……我慢してる？つまらないなあ……」

記憶の中で、いつかのヒソカとクロ口の影が重なった。

残酷な糸に絡まった蝶（後書き）

次はどうだろ・・・今回と同じくらいか
それ以上に残酷！

乞うご期待！

溢れ出た狂気（前書き）

残酷な描写を含みます
ご注意ください。

溢れ出た狂気

まるで玩具を与えられた子供のように。目の前の男の瞳は生き生きと輝いていた。

私の太ももは、つけねのあたりから、膝上までぎつくりと裂かれて。鮮血が、辺りに広がって小さな水溜りを作っていく。意識も朦朧としていく。まるで、揺りかごに入っているかのように。頭の中はクラクラして、裂かれた足はじんじんと、ぼんやりとした痛みを発していた。

頭の隅にまだ残るサイレン。早く逃げなきゃ。もっと危なくなる。早く逃げなきゃ。けれど、逃げる術も、意識も体力もない。

ただ四肢を投げ出して、そこに寝転がっているだけしかできない。ふいにクロクの笑い声が降ってきた。何を思ったのか、そのナイフを傍へ置いて、私の顔を両手で包み込んだ。それも、まるで壊れそうなものを扱うかのように、そっと。

「諦めちゃ面白くないんだけど・・・痛かったよね、ごめんね」

「・・・」

「君にもっと手加減すればよかったかなあ・・・こんなに意識朦朧とされてちゃ、面白くないよ・・・本当に」

「・・・」

「もっと裂いてもいいんだけど、それじゃ死んじゃうよね・・・」

「

すうっと、傷口の周りを撫でていく。

「っあ・・・うう・・・」

「ははっ・・・今、どんな声で啼ないてるか、自覚ある？ヒソカに聞かせてやりたいよ・・・いいや、皆に聞かせてやりたい・・・ああ、鎖野郎がいいかな・・・とつてもそそられるよ」

「・・・ヒ・・・？」

「ヒソカも仲間なんだよ」

耳元で優しく囁いたかと思うと、そのまま強く耳たぶを噛んだ。ひりひりする。少し出血したのかもしれない。けれど、耳だからまだマシかも。片耳では、クラピカから貰ったイヤリングが地面に擦れた音がした。噛んだ拍子に、顔が動いたのかも。ぼんやりとした意識の中では、それさえも曖昧だ。

「……うそ……」

「今まで蜘蛛に飼い慣らされていたなんて……不本意かい？クルタさん」

「馬鹿に……しないで……」

「ははは……威勢だけは残っているんだね……うん、いいよ……」

「……」

「……」

「だめだ……あんまり我慢利がなくなってきたかも……」

「え……」

「ちよつと借りるよ、身体」

「え……あつ……や」

有無を言わず、クロ口は私の両足を広げた。

否が応でも、分かる。もう、私は終わった

……

あまりにも素直で、あまりにも突拍子のない意見に、どこか少し拍子ぬけた。

ゴンもキルアも、本当にいい子だ。良い、友達だ。だから、あまり巻き込みたくなかったんだが。2人とも、私の計画に協力したいと言って聞かない。

「あまり、仲間に無理をさせたくないのだよ」

「ムリしてんの、クラピカのほうじゃん」

「それに友達なら、ムリだっで一緒にするべきだよ」

「・・・キルア・・・ゴン」

「だって、俺らだって力になりたいもん」

「俺もゴンと同じ・・・できるなら、なりたい」

「ありがとう・・・」

こんなに純粹な気持ちで迫られたら、妥協せざるをえなくなってしまうのではないか。嬉しい・・・けれど、本当に巻き込みたくない。

こんな、こんな私利私欲のための復讐に。醜い、復讐に。

「俺、クラピカには元気になってほしい」

「え？」

「ずっと塞ぎこんでたみたいだったから・・・元気なかったじゃない」

「・・・そうか・・・心配をかけた」

「そういえばクラピカ、ゴンってばさ、この前、クラピカが熱出したとき」

「ああ〜っ、それは」

「『クラピカの熱このまま下がらないといいのに』とか言ったんだぜ」

「・・・」

「それはね、だってさ、あのまま下がらなかったら、旅団と戦わずにすむかもって・・・ごめんなさい」

「・・・怒ってはいないさ。心配してくれたのだろう、ありがとう」

「・・・クラピカ」

「ああ、宜しく頼むよ」

「やった！」

「何でも言ってくれよな！」

「ああ。そうさせてもらっつよ」

クラピカがそういつた矢先、携帯が鳴った。

ディスプレイには『レオリオ』との表示。珍しい。

「はい、もしもし」

『クラピカ、まずい！早くこっちに着てくれ』

「は？何だ騒々しい」

『マリアがやばいつ．．．今、病院だ．．．そのホテルから近い．

．ヨークシンホスピタルだ』

「．．．ど．．．」

『すまねえ．．．俺が目を話していた矢先に』

「説明しろ、今すぐっ」

クラピカの取り乱した姿に、ゴンたちは顔を見合わせた。何かがあつたらしいが、全くもって検討もつかない。

『襲われたんだ。マリアが．．．旅団の．．．クロロに』

「．．．」

全てが止まったかのように。

クラピカの手から携帯が落ちると同時に、走り出した。

「クラピカッ！」

「もしもし．．．おっさん？．．．え．．．分かった、追っ。俺

とゴンもそっちに行く」

「キルア、何て？」

「レオリオからだ。今からヨークシンホスピタルに行くぞ。急げ」

「何？」

「クラピカの仲間が襲われたって。旅団に」

溢れ出た狂気（後書き）

次もさらにヒートアップ
お楽しみに！

ご評価のほどお願いします！

目覚めないまま

意識は曖昧だった。そのまま、クロロが好きないように私の身体を扱ったのは覚えている。でもそこからの記憶って曖昧だ。ありもしないものを見た気がするよ。

クロロがさつさと身なりを整えて、私の傍から立ち去るとき。クロロは私の背中に何かを刻み始めた。あのナイフで。薄皮一枚、剥がれる感覚。ヒリヒリと傷んで、背中が熱かった。

どうしようもなく、その熱に耐えかねていたときに、私の目の前に革靴の人が現れた。とても驚いた様子で、私に声をかけてくれたのはうつすら、記憶にある気がする。

私の傍らで通話中になっていた、置きっ放しの携帯。誰のか分かんなかったけれど、それは今、駆けつけてくれている人の携帯にながったのだろうか。

「おい、しつかりしろっ」

終わったかもって。クラピカ、ごめんって。降り出した雨が、さらに私の視界を悪くして。そう思ったんだ。死んじやうかもって。

「レオリオッ」

「クラピカ・・・すまないっ・・・本当に」

「許しがたいことだが、本来ならば、私がすべきことを勝手に押し付けたまでだ。こちらこそ、詫びよう・・・それより、マリアは」

「太ももから膝上にかけて、ざっくり裂かれてる。筋組織も神経も問題ないらしいが・・・ただ、出血の量がまずい。それから、背中に・・・」

「背中にどうしたのだ」

「蜘蛛の・・・シルエットが彫られていた・・・刺青みてえに・・・」

・皮一枚・・・剥がれて」

「な・・・」

「・・・それから・・・言いづれえことが・・・ひとつ・・・残ってるんだが」

「言え。聞かぬよりマシさ」

レオリオの額に、脂汗にもにた汗が湧き出てきた。

後から到着したゴンとキルアも、黙ってその会話を、今回ばかりは聞いていた。

「・・・医者の見解だが・・・犯された・・・痕がある・・・と」

「・・・くっ・・・」

「だから・・・そういうことも覚悟しておく必要がある・・・と」

・・・クラピカ、大丈夫か？」

「・・・すまない・・・大丈夫だ・・・風に当たってくる」

「・・・」

緋色に変わった、クラピカの目。美しいまでの、緋色。

「当たり前だよなあ、クラピカが怒んのも」

「分かってる！・・・俺が悪かったんだよ」

「何かしたの、レオリオ？」

「馬鹿言えっ・・・ホテルについて、ロビーで別れたのが間違いだっただよ・・・」

「・・・で、どうして分かったわけ？その人の居場所」

「あ、ああ・・・携帯が鳴った・・・そしたら、携帯の向こうで住所を言われて・・・来いって・・・そしたら」

「・・・もし蜘蛛の仕業なら、番号ぐらい調べるのも朝飯前だろうな」

「・・・」

「おっさんも気をつけたほうがいいぜ」

「・・・おっさん言うな」

「それより、退院したらどうするつもり？」

「どうするって」

「このまま、ヨークシンに置いとくわけにもいかないだろ・・・
それに回復までは絶対に、時間がかかる」

「いつから偉くなったんだ、キルア、おめえ」

「言っただじゃん。俺だって殺しの元プロだし。瀕死の重体くらい、
何度もあつてるよ」

「自慢することじゃねえ」

「それで俺思っただけど」

「何を」

「俺ん家に連れて行ったらどうって」

「はあ？」

「さすがの蜘蛛も入れないだろうし。俺ん家。一応、皆、暗殺の
プロだし。これ以上に安全地帯ってないと思うけど？」

「そうしなよ、レオリオ」

「は？え？俺・・・」

慌てうろたえる、レオリオの後ろから不意に落ち着いた声でした。
「そうしてもらえるとありがたいな」

すっかり緋色の目は消え、いつもの色に戻っている。

「クラピカ・・・もう大丈夫？」

「ああ。そうしてもらえるとありがたい、キルア」

「任せて」

「・・・すまない・・・迷惑をかけて」

「構わないよ。別に」

「クラピカ・・・俺は」

「・・・仕方ないさ・・・お前を責める気はない・・・レオリオ・・・
」

クラピカが、ふわりと痛々しげに、そう笑った。

「あ、もしもし？兄貴？今暇？・・・暇なら着てほしいんだけど・・・ヨークシンホスピタル・・・え？・・・俺？・・・まさか・・・うん・・・友達の仲間・・・マリアっていう・・・あ、そう・・・え？知り合いなの？・・・うん、じゃあ頼むよ・・・絶対来いよな・・・一週間後、とりあえず退院だから」

『オーケー、行くよ』

目覚めないまま(後書き)

さて、次はあの方も出てきますぞ。

朦朧とした意識の中

苦しい。体中が焼けるみたいに苦しい。痛かった。破られた皮膚も、裂かれた足も。そして奪われた清純さえも。何も残っていないみたい。ただの抜け殻みたいに、痛む体が。熱を持っている。熱を帯びて、私を苦しめる。

クラピカ、どこ　　。。。

額に、少し冷たい手が乗せられた。

「気持ちいい・・・」

少し笑ったみたいなの、息が頭の上から降ってきた。クラピカじゃない。けれど、誰でもいいや。

「いや、ホントにビックリしたよ、キルがあの子連れてくるなんて」

「俺も驚いた。兄貴の知り合いだったなんて・・・けど、サンキユ」

「うん」

いつもみたいな風景だけれど、どこかぎこちない、朝食の風景。ここはゾルディック家。キルアの実家である。ゴンも、クラピカも、レオリオもまだヨークシン。一旦、ついて帰ってきただけの、キルアと、夜通しのドライブなのに何ともないイルミ。

少し遅めの朝食はどうやら、自分たちしかないらしい。

少し後ろで、カナリアたちが立っている。家にいる間は何とも思わなかったけれど、久々に帰ってくるとちょっとヘンな感じがする。そんなことを思っていると、通用口が開く音がした。多分、ゴトだ。

「ゴトー」

「何でしょう、キルアさま」

「どうだった？」

「少し熱があるようですが、大丈夫でしょう。きっとすぐに下がります・・・侍医が処方した薬も飲みましたので」

「そっか・・・うん、それならいいんだ・・・ありがとう」

「いいえ。滅相もございません、キルアさま」

「（くすぐりたい・・・かも）」

「キルアさま・・・お電話です。クラピカという方から」

「あ、うん」

『すまない、押し付けたように任せてしまってた』

「いいよ、別に。気にすんなって」

『それで、今、どうだ？』

「寝てる・・・え〜と・・・1日は確実に寝たままかな・・・あ、待って」

『ああ』

「ゴトー、マリアって目、覚ました？」

「一瞬なら、覚めましたよ」

「ありがとう。一瞬なら覚ましたって」

『そっか・・・』

「オークション、どうだった？」

『・・・まあ・・・』

「いいや、話したくないなら・・・」

『すまない・・・落ち着いたら話す』

「あ、それから・・・」

『なんだ』

「多分だけど、俺ン家の侍医ししやの診断だけど．．．」

『ああ』

「多分、大丈夫．．．」

『．．．そうか．．．』

「じゃあ．．．いつでも来いよ．．．ちゃんと面倒、俺が見るし」

『来週には行こうと思っっている．．．すまない、任せた』

電話口の向こうから、クラピカのどこか疲れたような声がした。

「うん」

マリアの様子が気になって、食べかけの朝食はそのままに、俺はマリアのほうへ向った。

ベッドの上でピクリとも動かず、眠り続けている。本当に生きてるのか、疑いたくなる。けれど、少し包帯に滲んだ血を見たら、それが人形でもなんでもなく、人だと訴えているようだ。どこか安心するものがあった。血なんて生まれたときから、ずっと見てるのにおかしな話。俺、変わったなあ、ゴンたちと出会って。

「早く目が覚めないかな．．．マリア．．．」

「っ．．．」

「．．．あ」

目を開けたマリアの瞳が、綺麗なまでの赤色だった。さすがというか、これがクルタ族というのだった。納得できるものがあった。

クルタ族が、旅団に狙われたのも、どこか分かった気がする。

朦朧とした意識の中（後書き）

あゝ、手抜きみたいになっちゃった・・・

今ハンターラジオ、聞いてましたw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3890z/>

緋色の記憶

2011年12月24日09時53分発行